

自然文化誌研究会
(東京学芸大学冒険探検部)
創立50周年記念座談会

2025年6月21日

於:zoom

第2部 13:00～14:30

民族植物学的伝統知の継承・保全活動
『エコミュージアム日本村の実践活動』

黒澤友彦

(NPO法人自然文化誌研究会事務局長
木下養魚場)

The Institute of Natural and Cultural History

自然文化誌研究会 とは

1975年 設立(初期は東京学芸大学内の学生サークル)

- 略称INCH(インチ)。冒険・伝承・創造をキーワードに『国際的な視野で人間をとりまく自然と文化を野外において探求する野外環境教育のパイオニア』として、40年以上にわたって活動が続けています。2004年からNPOとして再出発し、活動の中心を山梨県小菅村に移し、子どもを対象とした『冒険学校』や市民を対象とした『のびと講座』『ELF環境学習中堅指導者養成講座(のびと研修会)』などの山村の自然や文化を学ぶ活動を通じて、持続可能な社会を形成していく上で必須である環境学習の実践と農山村の振興を実現させるため、エコミュージアムづくりを行っています。
 - 「冒険学校」の開催
 - 「植物と人々の博物館」の展開
- エコミュージアム日本村、雑穀街道など

2004年より NPO法人自然文化誌研究会 となる。



自然文化誌研究会 の主な活動歴

- 1975年 設立(初期は東京学芸大学内の学生サークル)
→この時期、木俣美樹男(現東京学芸大学名誉教授)が雑穀の調査で小菅村を訪れている。
- 1988年 東京学芸大学公開講座「子どものための冒険学校」を五日市にて開催
- 1993年 東京学芸大学公開講座「子どものための冒険学校」を大滝村にて開催(2002年まで)
- 1993年 中央アジア5カ国に第一次学術探検隊の派遣 JTクロスカルチャー大賞受賞
- 1996年 コカ・コーラ環境教育大賞受賞
- 1998年 北海道ニ風谷でアイヌ文化を学ぶ冒険学校の開催
→この時期、井村礼恵研究員が小菅村で調査を行っている。
- 1999年 TJネイチャークラブの結成(タイとの交流)
- 2002年 東京学芸大学公開講座ぬくい少年少女農学校共催(現ちえのわ農学校へ)
- 2004年4月 NPO法人の認証を受ける小菅村を中心に活動をはじめ、現在に至る。
→この時期、自然文化誌研究会の黒澤が小菅村に移住する。
- 2004年5月 第1回雑穀栽培講習会を中組地区においた「雑穀見本園」で開催
- 2005年 ミューゼス研究会の呼びかけ(企画を中心に)
- 2006年 小菅村中央公民館を「植物と人々の博物館」として整備も開始する。
- 2007年 「雑穀展」展示(木俣研究室)・「小菅の名人展」展示(吉富研究室)
- 2009年9月 「日本エコミュージアム研究会第15回全国大会」を小菅村で開催
- 2012年9月 「雑穀研究会 第26回シンポジウム」を小菅村で開催



はじめに①

- 「冒険」「探検」「パイオニアワーク」を標榜する自然文化誌研究会（東京学芸大学冒険探検部）ですが、2004年よりNPO法人になり、多くの市民も加わっているので、ここでは「NPO法人自然文化誌研究会」として、それに基づいた団体としてのフィールドにおける実践活動を紹介します。直接、冒険・探検の話に繋がりません。
- 専門的な話・理論的な話は、前後の井村礼恵さん、1部と3部の方であると思いますので、私からは私の立場も込みで、実際の実践活動のお話になるかと思います。

はじめに②

- 私は本研究会の事務局ですが、私自身は研究をしておりません。すべての業務に携わる本会の良い意味で雑用係全般なのかな、と。事務局っていうのは。
- メリットというか特長としては、活動拠点となるフィールドに実際に住んでいると言う事(もう永住)で、小菅村と言う地域においては村民と言う立場もあると言う事です。小菅村については後ほど説明します。
- これは自分では気づかないですが、本会の運営メンバーからも特長であろうと言われているので、客観的にそういう事実はあるのかなと、いうところです。

「エコミュージアム日本村の実践活動」 というタイトルで話すために

- 表題について話すにあたって、自分の生活と切り離せないことが多々あるので、自己紹介から入ります。
- 私の話は主に2000～2025年現在までの話になります。

自己紹介①

- 1977年 神奈川県生まれ
 - 個人的には「故郷」の概念・義務はなく自由であった。
 - 結果的に現在住んでいる小菅村に移住・定住が容易であった。
- 1996年 東京学芸大学入学。「自然文化誌研究会冒険探検部」に入部
 - 学生時代の主な(探検)活動は登山、沢登りなどの山が中心だった。
 - その頃から奥多摩方面にはよく通っていた。

(1部で話をした日比野さんは大学院生でした)

「冒険」「探検」を志向しつつも、専門性・向上心が低く、「沢登りをやっておけば、野外活動技術がトータルで向上していつか役に立つから・・・」という言い訳があった。ダメな探検部員だったな

「子どものための冒険学校@秩父大滝村」で学生スタッフをしたが、子どもよりも運営に興味を持った。

自己紹介②

- 2002年 自然文化誌研究会事務局長に就職＋学芸大学農園勤務
- →農園勤務で基礎技術を学んだので山村に移住の際に一つの武器になった。
- 2004年 自然文化誌研究会がNPO法人となる（東京都認証）
- 2004年 自然文化誌研究会が多摩川源流の山梨県小菅村を活動のメインフィールドにするため、古民家を借りる。
- 東京生活が煮詰まっていたこともあり承諾、井村礼恵さんから関係者を紹介してもらったが、単身での移住の際は、小菅村と東京都の2拠点生活を考えていた。
- 26歳の春だった。
- 自分自身のモチベーションは高くはなかった。不勉強、今もなお不勉強。

- 2004年 小菅村「100%自然塾(あそんべえ部会)」 山菜採り・きのこ採りほか
- 2006年 狩猟を始める。小菅村猟友会に所属(2019年にやめた)
- 2007年 小菅村外者と結婚して小菅村の村営住宅に住みはじめる。
- 2014年 小菅村に家を建てる、定住確定する(今後悪いことをしなければ…)
- 2019年 第一子誕生
- 2020～2021年 コロナ禍でもあったが、子育てをメインでする。
- 2022年 子どもが小菅村保育所に通いはじめる

＜現在の仕事＞

- ・NPO法人自然文化誌研究会事務局長
- ・木下養魚場(ヤマメほか溪流魚の養殖業)

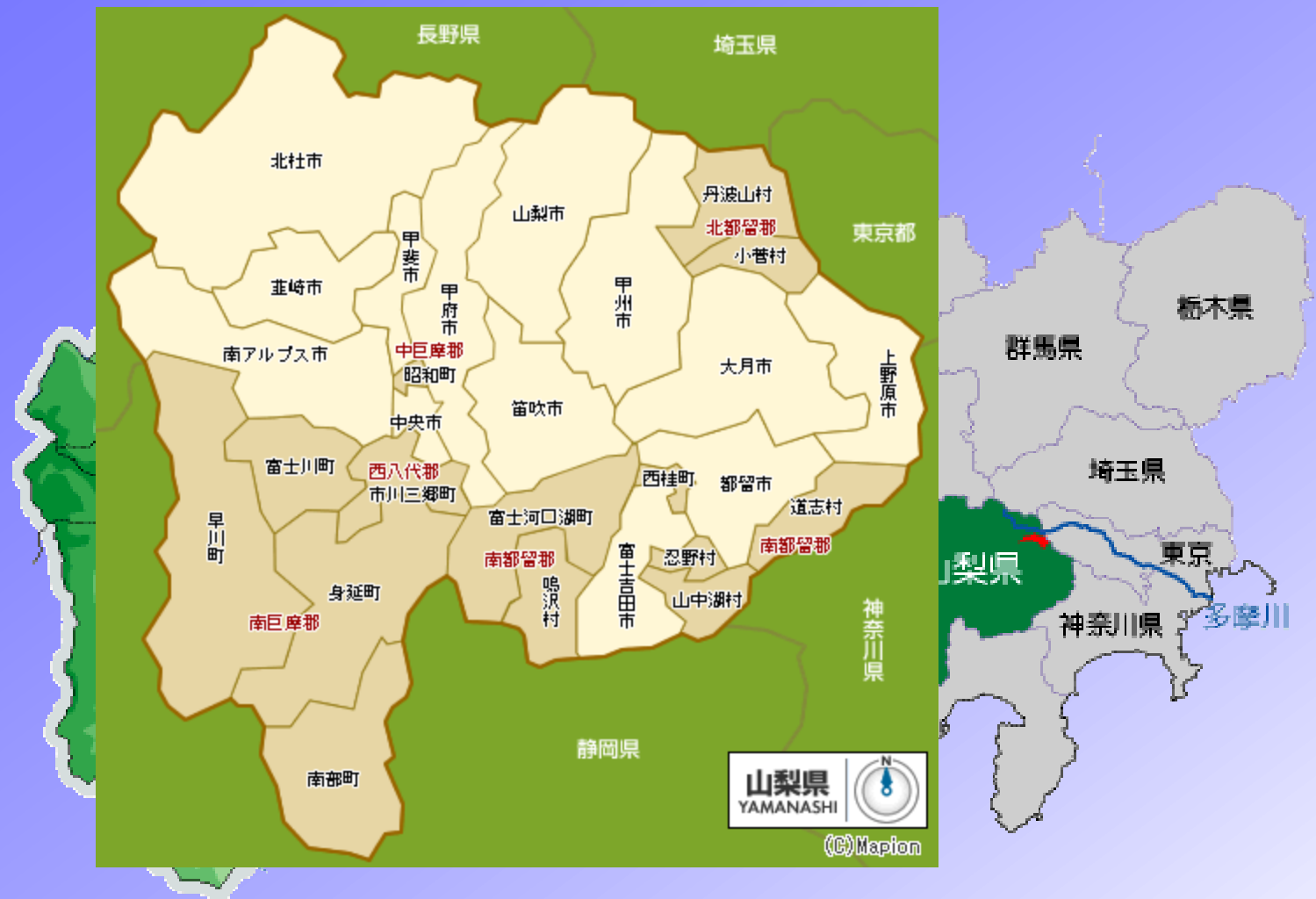
に絞っております。個人的に関わる団体は100%自然塾ぐらい。
地域おこし協力隊など、若者の移住者が増えたので埋没して楽になりました。

村八分とかありません、もしあっても私個人は困らない生活環境です。やられたらSNSで晒しますね、きっと。(時には強気にならなくてはならない)。

小菅村というフィールドの話

- まずは小菅村をサラッと紹介

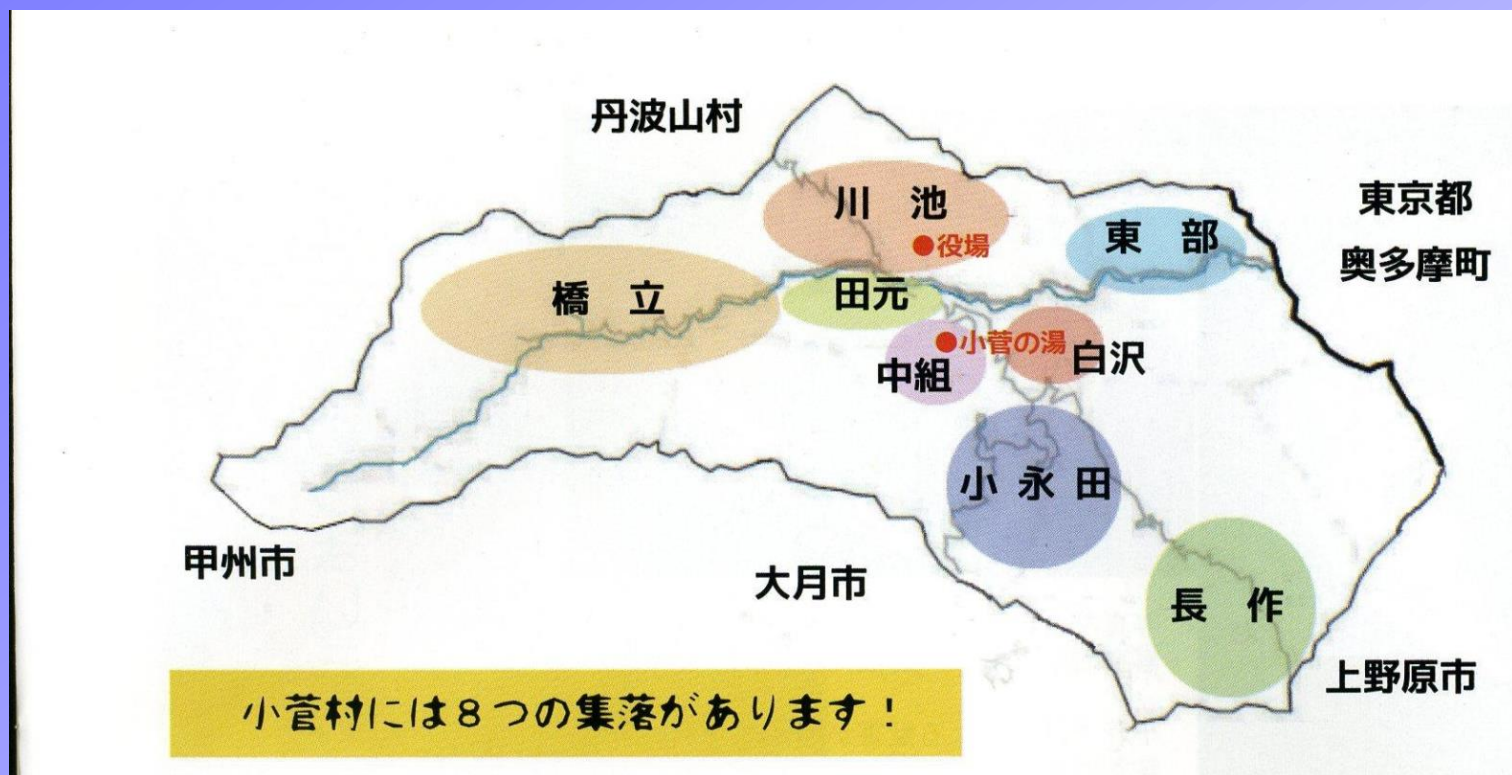
小菅村の立地



特長①: 東京都と隣接。

特長②: 多摩川「流域」というキーワードでの交流、連携を進めている。

- 橋立地区: 神代神楽、掛け軸畑
- 川池: 村役場はじめ主要な機関。旅館など、三ヶ村祭典フィッシングビレッジ、村営住宅5棟。
- 田元: 三ヶ村祭典、村営住宅10棟
- 中組: 小菅の湯、フォレストアドベンチャー、物産館、道の駅、村営住宅10棟。
- 小永田: 神代神楽
- 白沢: 源流大学、原始村キャンプ場
- 東部: 森林公園キャンプ場、玉川キャンプ場
- 長作: 観音堂、寺子屋自然塾



小菅村の特徴

＜小菅村＞

人口：622人（2025.5.1） 334世帯

住居のメイン地域の標高は650m前後

村内の森林面積：約95%

東京都水源林：約33% 下水道普及率 100%（H6年完了）

2024年5月26の村長選挙は投票率95.36%でした

主な観光施設：

- ・雄滝、白糸の滝、多摩源流まつり（通算3？回）
- ・釣り場（管理釣り場、C&R、自然区間の3つに分けている）
- ・フォレストアドベンチャー（H26.4月）
- ・松姫トンネル開通（H26.11月）、道の駅こすげオープン（H27年3月）
- ・株式会社 源（小菅の湯・釣り場・物産館・道の駅・フォレスト）
- ・地域おこし協力隊が12期生まで30人超
- ・小菅村源流親子留学制度

高齢社会・過疎・「限界集落」という言葉が当てはまるかどうか。13

日本で最初にヤマメの養殖に成功した

- ヤマメの養殖について
- 1961年(昭和36年)頃に養殖が始まる。
- 酒井いわお氏
- 現在3業者。最盛期は8業者ほどあった
- ヤマメ・イワナ・ニジマスの3種類を養殖。
- 3月の河川釣りの解禁～11月の紅葉シーズンまでが売り時。
- 台風の際は養魚場に泊まり込んで水の管理をする。
(台風の際に、田んぼで水路を見に行って流されるのと同じだが、
「当然見に行くに決まっているじゃないか」
- 水質はきれいな方が良くても、大事なのは水温と水量。
- 個人的にだが地元の伝統産業を継承する立場にいる(跡取りがないし)

自然環境はかなり緩めの山村です

- 雪下ろしなどは無い
- 東京が近い
- 移住者にやさしい(歴史的背景アリ?)

小菅村の風景



エコミュージアム日本村の景観



雑穀見本園



急傾斜のこんにゃく畑

『エコミュージアム日本村』

- ・日本の生活原点を感じる、学べる村
(日本の中の日本が残っている)
- ・特色として「植物と人々の生活」をもつ
(展示、書物、標本など)

『植物と人々の博物館』

『エコミュージアム日本村』のコアミュージアム(≡ビジターセンター)
も進めてきていた

民具展示：暮らしの知恵の伝承



古老からの聴き取り調査 2006. 5



小菅産材の切り出し 2006. 12



小菅産材の展示台 2007. 3



小菅産材の木工教室 2007. 5 小金井市

「小菅の名人」の巡回展示



日本エコミュージアム研究会第15回全国大会(2009.9.5～6)

テーマ:「源流の村＝小菅村＝日本村」～生物文化多様性を紡ぐ

9/5	12:00	受付開始 ポスター展示
	13:00	エクスカーション6コース
	16:30	小菅の湯入浴、物産館のご案内
	18:00	交流会、夕食と懇談
	20:30	小永田地区「神代神楽」の見学
	深夜まで	夜なべ談義
9/6	6:00	野鳥観察会、河畔遊歩道散策
	9:00	ワークショップ
	13:00	閉会后、奥多摩むかし道の散策

- ①「源流の景観と食体験」コース(こんにゃく畑とワサビ田:橋立地区)
小菅村の最上流に位置する橋立地区では、斜面でこんにゃくの栽培を続けています。壮観な景観です。また、源流の自然を活かしたワサビ田の見学とワサビ漬け作りの体験も行います。
- ②「民話七不思議」コース(長作観音堂と古からの伝承:長作地区)
重要文化財「長作観音堂」と長作七不思議伝説(片葉の葦、二羽の鳥など)、セイノ神の道祖神など、地区に伝わる不思議に耳を傾けてみませんか？
- ③「森の癒し(森でほうれる)」コース(松姫峠～松鶴のブナ～鶴寝山:小菅村エコセラピー研究会)
面積の95%が森林の小菅村。癒しの空間として森林を見つめ直します。標高1,300メートルのブナやミズナラを中心とした広葉樹の中でゆったりとした時間を過ごしませんか？

- ④「雑穀オコジュウ」コース(大福、雑穀見本園、室、炭焼き窯:中組地区)
「オコジュウ」とは、昼食と夕食の間に食べられた「おやつ」のことです。アカモロコシ(モロコシ)とオヤマボクチの葉を使った大福を臼と杵で搗きます。また、小菅村で伝統的に栽培されている雑穀の在来品種見本園や、昔から貯蔵に利用した「室」、炭焼き窯をご紹介します。
- ⑤「多摩川源流エコツアー」コース(多摩川最源流部:多摩川源流研究所)
シオジの天然更新、4mを超えるセンノキ(ハリギリ)、モミジ、ツガ、カツラ、コケなど、東京都水道局がその水源林として守っている源流の魅力を物語を混じえてご案内します。
- ⑥「伝統工芸(竹細工)」コース(「めかご」「おざら」づくり:小菅村ゆうゆうクラブ)
スズタケを使った「めかご」、マダケを使った「おざら」を作ります。昔から、小菅村で使われてきたもの、小菅村の智恵者からその技術と心を学びます。



エコミュージアムをなんでやるのか？

- シンプルに目的は・・・
- 住民自ら誇りを持つことができる
- 世間に伝えて再スポットを浴びる
- 交流する機会が増える
- 交流が増えるとお金が落ちる、継承者を地域だけではできないので関係者を増やす
- 「何型」とかあるようですが、複合していてOKかと。



お題目的に
通常のプログラムのイメージ(団体目線)
農山村に存在する豊富なエネルギーの活用
(燃料、食料、知恵)



過疎化と後継者不足によって継承、活用が難しい。



都市との交流・活用により、眠りつつある「伝統知の継承」。



都市民にとっても、学ぶ機会になる。

↓ (遊び、体験学習、サバイバル)

交流による移住者の獲得、経済的効果、国土の保全

どこの団体も、どんなプログラムも、SDGsも目指すところはほぼほぼ同じだと思います。

生業のイメージ(個人目線)

農山村に存在する豊富なエネルギーの活用
(燃料、食料、知恵)



個人レベルでやること、地域と連携してやること



継承できる伝統知と難しい伝統知



生業の選択



個人レベルでやれる生業があるという事は、伝統知の維持・楽しみ
(時には)としてスキルアップが自動的にできるシステムだと思う。



農山村に住む自信と誇りの獲得になったらいいな。

こどものための冒険学校

- エコミュージアムの実践活動と「冒険」「探検」を重ね合わせた
- 「(子どものための)冒険学校」をやっています
- 詳細は第3部の方で・・・。

年間スケジュール

季節ごとに、「冒険学校」「のびと講座」を開催します。

4月 のびと講座「野草の天ぷらとお茶つみの会」(日帰り)@小金井

5月 冒険学校「むらまつりキャンプ」(2泊3日)

8月 冒険学校「こすげ冒険学校」(6泊7日)

9月～10月 のびと講座「INCHまつり」

12月 冒険学校「まふゆのキャンプ」(2泊3日)

・これまでには
「ELF環境学習中堅者指導者養成会」
「ログビルダー養成講座」
「小菅村の郷土食プログラム」
などを実施。

冒険学校の特色

- 1. 基本的な考え方（「冒険学校のあゆみ」より抜粋。冊子を欲しい方は遠慮なく言ってください）
- 冒険学校では13年間（1988年～2000年）の歴史の中で、試行錯誤を繰り返し、内容に工夫を凝らしながら活動を続けてきました。その基本的な考え方は子どもたちの自主性を尊重し、行動を促すのではなく、行動を「待つ」という姿勢にありました。これは十分なプログラムを用意しながらも、選択は子どもに任せることです。極端に言えば、子どもは何も選ばず、森の中で一週間昼寝をして暮らしてもよいということでもありました。この考えは、現在の自然文化誌研究会の環境学習活動にも生きています。大まかにまとめると以下の通りです。
- 秩父多摩国立公園に隣接した農山村の自然・文化環境の中で、教育的配慮のもとに野外活動を行い、地域の自然・文化遺産を継承するナチュラリストのジュニアリーダーを育成する。安全が確保される限りにおいて、子どもの自主的な活動を尊重し、見守り、援助する。プログラム選択の自由を可能な限り拡大する。これには子どもの発案による新しいプログラムと一緒に作ること、プログラムに参加しないで森の中で寝て暮らすことも含む。国立公園内での活動であるので、環境保全のためにロウ・インパクトを心がける。環境教育の研究普及活動の一環として、子どもと一緒に新しい自然接触・自然認識の方法を試行する。子どもが自然に抱かれて、心身を解き放ち、多くの友達を得て、満ち足りて家庭に帰ることを期待している。（NPO法人自然文化誌研究会H.P.より引用）
- ということで、6泊7日の長期キャンプで、子どもたち一人一人の自主性を尊重するということは、
- 「教える」のではなく、「見守る」姿勢で、子どもたちと向き合って、一緒に楽しんで生活してくれれば大丈夫です。但し、生命の危険に関することなど、叱る時には厳しく叱ってください。
- 実際に、本会の冒険学校では、子どもたち一人一人の自主性を尊重するため（選択の自由）、全員でのプログラムは、ミーティングや温泉、最後の片付け以外はあんまり無いです。



- **講師で小菅村の方々が関わり、伝統知を遊びながら教わり継承者の目的を果たします。** 31

冒険学校「むらまつりキャンプ」5月3~5日(2泊3日) 於:小菅村

小菅村の「多摩源流まつり」にも参加(村人と交流)



- ・主なプログラム: テント設営、焚き火、薪割り、山菜採り、ヤマメの調理、登山、小集団行動、川遊び、五右衛門風呂、パン作り、芋植えなど。



こすげ冒険学校 8月4日～10日(6泊7日)於:小菅村



:テント設営、焚き火、薪割り、ヤマメの調理、登山、小集団行動、川遊び、五右衛門風呂、木工、竹細工、染物、沢登、星空観察、ナイトハイクなどなど

冒険学校「まふゆのキャンプ」 12月23日～25日(2泊3日)於:小菅村



- ・主なプログラム: テント設営、焚き火、薪割り、ヤマメの調理、小集団行動、ナイトハイク、星空観察、氷の彫刻、ツリークライミング、餅つき、炭焼き窯体験など。

我々の冒険学校の目的は？

- 当初はパイオニアワークであったこと。
- 2000年の第13期終了時に、幹部たちの選んだ終了という判断は、「既にパイオニアワークを達成した」という意味もあり、それでも継続を選んだメンバーは、探検部系ではなく「冒険学校」に意義を感じたメンバーであろう。全員探検部ではないから。

今、我々が継続する冒険学校は、年間で25人の子どもしか受け入れていない。25人×年1回である(春と冬は緩い冒険学校なので省略)

毎年25人＋スタッフの学生25人＝50人ぐらいを育成する？

もっと増やすべきか→否？ もっと回数を増やすべきか→否？

冒険学校の存在意義は、この活動が世間に広まって、模倣してもらい、広げて欲しいという立ち位置になるのか。我々自身が増やすのではなく大本の実践活動、実践活動の基づく発言である？

自然文化誌研究会の将来は？

最終的に目指すのはどこなのか？

会の運営込みだが、既にパイオニアワークではないけれども、「冒険学校」の継続でナチュラリストの育成スタッフの育成を常にしておくこと。

この実践がないと、理論だけ言うわけにいかない。同時に、パイオニアワークを目指し、キャンプ屋さんにならない、誇り高き集団と言うところでしょうか。

個人的に思うところ

現在の80～90代は時代背景もあり、基本的に「何でもできる・自らの手で行った世代」

⇔スマホやインターネットは使えない。

その世代から多くの事を伝承し、記録してきた。

→本会はよく達成したと思う。そして新たに記録する機会、すべきことは減る。

70代になると生活が豊かになり始めているため、上の世代に比べて、「何でもできる」感は下がる。

10年後を考えると、伝承すべきことは多く減り、記録が残っている形になる。

それでも生活に密着して残っている技術や文化は残るはず。伝えるはず。

→何でもかんでも伝承しきれない。でも伝承は続ける。

自分は、地域の先達から多くを習ってきた立場なので、その一人として生きていく事になるのかな、事務局をしながら・・・。

雑穀の普及啓発について

- ・なぜ、雑穀なのか？

(→一部で木俣さんからお話の合ったとおり)

- ・小菅村は農山村(山間地)なので伝統的に雑穀の栽培がおこなわれていた。

- ・雑穀栽培の担い手が維持・増加するように、自信を持てるように小菅村で、雑穀の普及啓発に取り組む

雑穀栽培講習会 2004年5月より「雑穀見本園」

雑穀商品の開発 ビール、クッキー、温泉のメニューほか

生産した雑穀の買い取り制度 小菅の湯、小菅村役場と協力

2016年より、神奈川県藤野へ(次の話し手の宮本さんにつづく³⁸)



雑穀栽培講習会、 源流祭り(そばク レープ)、植物と 人々の博物館ロゴ マーク



村人のキビの畑の防雀網掛け
2006. 9

雑穀食の普及



商品開発 雑穀洋菓子 2007. 3



雑穀栽培調理講習会 2006. 9



民族植物学実践講座 2007. 5



伝統食づくり 2007. 5

雑穀発泡酒ラベル、エコミュージアム 日本村のロゴ



博物館展示解説書



雑穀をあーとする特別展

